

廃棄される海藻を利用して町おこし

NPO法人 利尻ふる里・島づくりセンター（利尻町）

「しおりと、キーホルダーのどちらを作りますか?」。インストラクターから「海藻クラフト体験パック」を手渡された。その袋は真空パックになっており、中にはテングサやスジメなどの海藻、ナミキソウやアジサイなどの花がプレスされて入っている。観光客の女性と一緒に「海藻押し葉」を体験してみた。

ここは、利尻島の「島の駅—海藻の里・利尻—」。利尻島で一番古いとされる海産物問屋を改築して建てられた場所で、利尻島の情報発信スポットとも言える。中にはカフェやギャラリー、海藻を使ったクラフトアートの展示があり、海藻押し葉の体験もできる。運営しているのがNPO法人「利尻ふる里・島づくりセンター」（代表理事 吉安高嶺、以下 島づくりセンター）である。

体験パックの横には、ハサミとピンセットが置かれてある。筆者はしおりを選んだので、長方形の紙と薄いプラスチックが目の前に置かれた。観光客の女性は群馬県から来たという20代、その彼女の前にはキーホルダー用の細長い透明のプラスチックが並べてあった。

「ハサミで切ってもいいですから」インストラクターが教えてくれる。

なるほど。草花の葉と違い、海藻はセロハンのように半透明で大きいため、ハサミを使えば様々な形に工夫ができる。

観光客の女性は、「深緑や赤紫の海藻があって、こんなに素敵なクラフトが作れるんですね」と彼女自身が作ったキーホルダーを嬉しそうに眺めていた。



海藻押し葉の指導を受ける観光客

■ 廃棄される海藻を利用した町おこし

このクラフトの材料となっている海藻は、時化で海岸に打ち寄せられる「雑海藻」である。利用価値もなく、悪臭が発生するいわば「海藻ゴミ」。利尻町総務課の佐藤弘人さんは、「浜辺に打ち上げられて臭いし、厄介者

だったんです。こうした邪魔な海藻を町ではわざわざ重機で処分していたのです」と説明する。利尻島の周辺には 100 種類以上の海藻があるが、「こんぶ」などの製品となるのはほんの数種類。あとは海藻ゴミとして処分されていた。

島づくりセンターでは、こうした雑海藻を利用して、クラフトの素材として地域の芸術文化へ活用すると同時に、浜辺の環境も守っている。

しかし、雑海藻をクラフト素材にするのは簡単ではない。島づくりセンターの吉安代表理事によれば、まずボランティアが海岸を清掃、海藻を集める。その海藻を分け、洗って塩を抜き、新聞紙で挟んで重しをかける。約 1 週間、新聞紙は毎日取り換えて重しも変えていく。最後にビニール袋に詰め、空気を抜く。これらを一つ一つ手作業で行っているという。

「ただ、手間がかかっているということは、逆に言えば雇用を生み出す可能性もあるのです」と言い切る。



利尻ふる里・島づくりセンターが運営する「島の駅」

また、同センターでは地元小中学校に働きかけ、海藻押し葉の時間を取ってもらったり、地元高校の卒業記念に海藻押し葉で作ったしおりをプレゼントしたりしている。

「島から出てしまう青年たちにも、利尻で生まれた証しとしてこれを知ってもらい、いつまでもこの海藻押し葉を持っていて欲しいのです」と吉安さんは語気を強くしていた。

■ 冬場には仕事がない

この島では、夏場にはウニ漁、コンブ漁、海産物の製品化などの仕事がある。しかし、冬場には仕事が途切れてしまう。近年、公共事業の見通しも暗く、島の内外で土木建設作業に携わっていた男たちの仕事も減ってきていた。島の仙法志漁協青年部では、「30代の男が家でぶらぶらしているなんて」と将来に不安を抱えていた。

そんなおり、札幌在住の押し花作家だけだりょうさんが、利尻島で押し花の講習会を行った。そのとき、「岸辺の海藻が、なんてきれいなんだろうって思ったんです」と、島の海藻を使った作品を手がけた。これが、海藻押し葉のきっかけとなった。2001年に仙法志漁協青年部や主婦らが中心となり「海藻おしばの里づくり実行委員会」(会員 22人)が結成された。

2002年には、田島順逸町長と同実行委員会の石橋円彦委員長が熊本県の菊鹿(きくか)町を視察した。菊鹿町は「押し花の町」、花の教材加工や体験観光で町づくりをして

いる。JA婦人部の始めた趣味が企業化、15年ほどで1億円以上の年商と20人近い雇用を創出していた。

利尻でも官民が力を合わせ「『資源蘇生』」をテーマに、利尻ならではの新しいブランドとして全国に発信していきたい」と決意を新たにした。

2004年には、全国初となる「海藻押し葉・押し花融合コンクール」を利尻町で開催した。予想以上に申し込みがあり600人がエントリーした。入選作品50点は、北海道庁をはじめ各支庁などで広く展示された。そして、2007年には同委員会をNPO法人化、「利尻ふる里・島づくりセンター」として発足させた。さらに、カフェとギャラリーを備えた「島の駅」をオープンさせ、島づくりセンターが運営を行うこととした。

こうした活動が少しずつ成果を上げ、昨年（2009年）はこの島の駅に5000人以上が訪れるなど、海藻押し葉の知名度は高まっている。



「島の駅」の中にあるギャラリーには、島をイメージさせる球体オブジェが展示されている

「見るだけの観光から、文化を体験できる観光へと転換させ、利尻をより知ってもらいたいと思っています。さらに、利尻からもっと情報を発信したいのです」

総務課の佐藤さんは、そう熱く語っていた。

■ 次世代に繋げていくために

島づくりセンターでは、海藻押し葉だけでなく、「地ビール」のプロジェクトも進行させている。利尻の美味しい湧き水を原料にしたビールで、ラベルには海藻押し葉のシルエットをあしらっている。将来的には、地元でビール工場を造りたいとのこと。

「ただ、誤解して欲しくないのですが……」と言い加えた吉安さんの話が印象的だった。

「私たちにとって一番重要なことは、利尻で私たちが両親や祖父母から受け継いだものを、次の世代に繋げていくことなのです。企業誘致や雇用確保はあくまでその一環に過ぎません」

■ 連絡先

〒 097-0401 利尻郡利尻町沓形字本町
NPO 法人利尻ふる里・島づくりセンター
吉安 高嶺
TEL/FAX : 0163-84-2514
Email : rrr-rishiri@coral.plala.or.jp